

小野蘭山旧蔵の琉球勾玉について

徳田 誠志

はじめに

筆者は昨年夏、本学博物館山下学芸員、山口講師と共に武田科学振興財団杏雨書屋が所蔵する「小野蘭山愛蔵石類」の調査を実施した。その調査報告は『関西大学大学博物館紀要』に掲載したところであるが¹⁾、先般その調査成果を持参し、改めて杏雨書屋を訪れた。その際、同書屋の瓢野由美子氏より、小野蘭山の所蔵品について『蘭山先生蔵畜品目』という書物が存在することをご教示いただいた。本稿では同書に掲載された琉球勾玉を紹介するとともに、小野蘭山が琉球勾玉を所蔵していたことの意義、あるいは江戸時代における琉球勾玉研究に触れながら、琉球勾玉とは何かを再度考えていきたい。

1. 「小野蘭山愛蔵石類」の琉球勾玉について

それではまず、昨年度調査した「小野蘭山愛蔵石類」に含まれていたの琉球勾玉について、その概要を再録しておく(図1)。本品は全長7.07cm、頭部幅2.17cmを測る。頭部には2条

の沈線が刻まれており、いわゆる丁子頭の勾玉となっている。全体に丁寧な研磨が施されており、腹部、背部とも丸みを帯び、胴部断面はほぼ円形を示す。頭部には直径6mm程の孔が穿たれており、孔の直径は中心部に向かって小さくなっていることから両面から穿孔されたものと考えられる。この孔から延びる沈線はやや波打つように刻まれている。頸部には成形時の削り痕がわずかに認められる。石材はネフライト(軟玉)と考えられ、表面には気泡状の凹凸をわずかに認めることができる。色調は黒色から暗緑色を呈し、ほんの少し灰色がまだらに認められる。重量は、78.5gである。

この観察結果からこの勾玉は古墳時代の遺物ではなく、いわゆる琉球勾玉に属するものと判断した。琉球において勾玉が出土することは、世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の構成資産である「斎場御嶽(三庫理)」からも勾玉が出土しているように、琉球において祭祀に用いられる器物であることはこれまでも

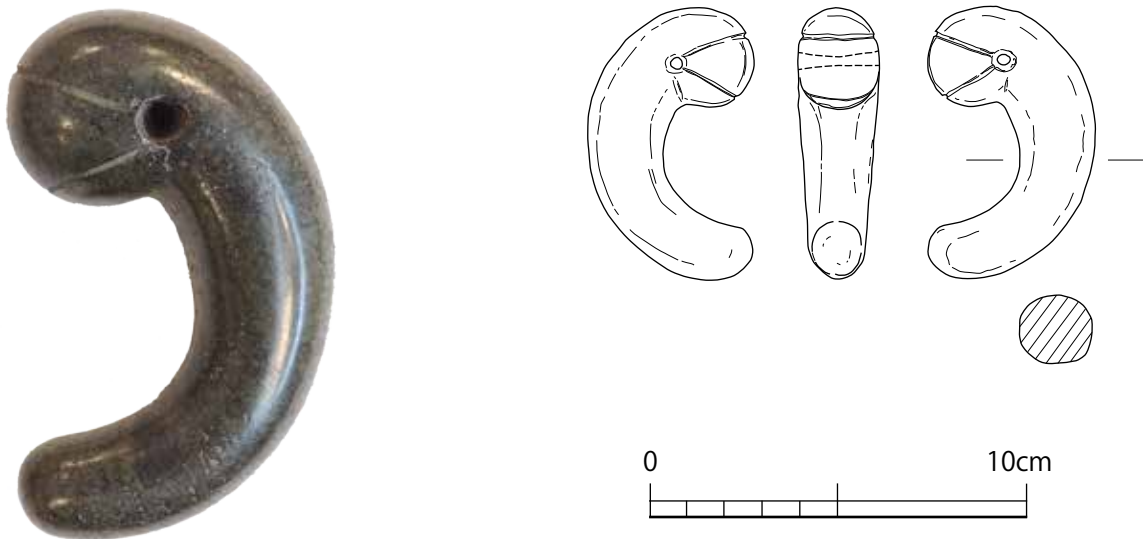


図1 杏雨書屋所蔵琉球勾玉

知られている。この琉球における勾玉の出自については、日本本土の古墳時代の勾玉との関連を見出すことは難しいものと考えているが、まだ明らかになっていないことも多い。

さて、この琉球から出土する勾玉のうち全長が7 cm を超える大きさであって、頭部が丁子頭となるように沈線が施されているものを「琉球勾玉」として考察していきたい。このような琉球勾玉については江戸時代においてすでに注目をされており、木内石亭による『曲玉問答』（1783（天明3）年刊）にも、琉球において「ノロクメ」と呼ばれる女性司祭が首に掛けて使用するものという正しい認識に基づいた記述がなされている。その後明治初頭の「琉球処分」という混乱期に多くの琉球勾玉が本土に持ち込まれたと考えられ、本学博物館が所蔵する神田孝平旧蔵の琉球勾玉もこの頃に将来したものであろう。

このように「小野蘭山愛蔵石類」に含まれていた勾玉はその大きさ、石材、施文方法のいずれの点からも典型的な琉球勾玉といえる。そしてこの琉球勾玉が小野蘭山の手元に存在していることは、18世紀後半に琉球から実物資料が本土にもたらされていたことを初めて確認できるという点に大きな意義があるものと考えている。

2. 『蘭山先生蔵畜品目』について

本節では、瓢野氏にご教示を得た『蘭山先生蔵畜品目』を紹介していく。本書は現在愛知県西尾市岩瀬文庫が所蔵している。上（20丁）・下（35丁）の2冊からなり、縦23.6cm・横16.4cm を測る小本である。岩瀬文庫の古典籍データベースによれば、小野蘭山の弟子にあたる水野皓山（1777～1846年）が書写したものであり、内題は「嵐山先醒蓄蔵産品」、書題簽は山本榕室筆と記されている。内容は蘭山が所蔵した植物、鉱物（自然石を含む）、魚介類の品名が列記されており、その下に簡単な解説（出土地や色彩などの特徴、用途）が付けられ、一部には図も添えられている。内容を概観すると鉱物や自然石あるいは植物とともに、僅かではあるが今日でいう考古資料の記述も認められる。例えば上巻八丁には「濃州各務野天狗飯土色砥ノ如シ」とあり、現在の岐阜県各務原市で出土したと想定される「石匙」の記述があ

る。他にも「曲珠」などの記述も散見されることから、蘭山がどこまで自然石と区別し、人工物（神代石）としての認識があったかについては不明だが、結果的に考古資料も所蔵していたことが分かる。

そのうち図が掲載されているものを1点紹介しておきたい。図2に示した通り、今日でいう子持勾玉である。図は横向きに描かれているが、江戸時代において子持勾玉は、「石剣頭」として認識されることが多かった。そのため腹側の勾玉部分が剣頭の柄（茎）と考えたために、横向きに描かれたものであろう。添えられた文章には「和州三輪産 冷滑石ニ作ルモノ薄青黒シ 神代頃 死人ノ佩玉」とある。用途については「石剣頭」ではなく「佩玉」としていること、さらに現在の奈良県桜井市三輪山麓にある大神神社の境内地からは多くの子持勾玉が出土しており、用途や出土地については正確に伝えられているものと考えられる。



図2 『蘭山先生蔵畜品目』掲載「子持勾玉」

このように本書の存在によって、蘭山の手元には植物だけでなく様々な鉱物や自然石、さらには考古資料が存在していたことは間違いのない。書写した人物が弟子の水野皓山であり、題簽も弟子筋にあたる山本榕室であることから記述の信ぴょう性も高く、それゆえ現在、杏雨書屋が所蔵している「小野蘭山愛蔵石類」が、こ

の『蘭山先生蔵畜品目』に掲載されている一部である可能性は十分に考えられる。

3. 『蘭山先生蔵畜品目』に描かれた琉球勾玉について

続いてこの『蘭山先生蔵畜品目』に描かれた琉球勾玉を見ていきたい。琉球勾玉は下巻六丁に図入りで掲載されている(図3)。添えられた文章には「琉球婦人ノ佩玉 青黒色ニシテ光り黒斑文アリ」とある。図は縦7.1cmほどに描かれており、琉球勾玉の大きさを示しているかのように原寸大と考えられるものとなっている。記述についても青黒色であり、まだらな文様の存在や光沢のある状況は、琉球勾玉の実物を前にして描いているものと考えられる。但し、頭部にある2本の沈線については触れられ



図3 『蘭山先生蔵畜品目』掲載「琉球勾玉」

ていない。

さて、ここに描かれた琉球勾玉と、「小野蘭山愛蔵石類」にある琉球勾玉を比較してみよう。大きさや胴部から尾部にかけての丸みや色調、さらにはまだらな文様の状況もよく似ているとあってよい。但し、頭部に穿たれた孔から延びる2本の沈線が作り出す角度は、両者で大きく異なっている。よってこの図に描かれたものが、杏雨書屋の所蔵する琉球勾玉であると断定することは難しい。但し、形状や色調がよく似ていることと、複数個の琉球勾玉が小野蘭山の手元にあったとも考え難く、同一のものである可能性も捨てきれないとしておきたい。

また添付されている文章には「婦人の佩玉」という記述があり、木内石亭の考察と通じるところがある。石亭は蘭山の弟子にあたることから師匠として弟子の記述を参照することが考えられるにしろ、この時期の本草家にとって琉球勾玉についての正確な用途が広く共有されていたものと考えられる。

4. 『蘭山先生蔵畜品目』に掲載された琉球勾玉の意義

今回『蘭山先生蔵畜品目』において、琉球勾玉が図入りで掲載されていることを紹介してきた。ここに描かれた琉球勾玉を「小野蘭山愛蔵石類」に含まれていたものと同一であるという判断は保留しておく。しかしながら蘭山の手元に確かに琉球勾玉が存在していたことは、実物資料とともに文献史料からも裏付けられたものと考えている。このことは「小野蘭山愛蔵石類」の来歴を考えていくうえでも重要なことである。

すなわち「小野蘭山愛蔵石類」については、箱蓋には和紙に押印された「衆芳軒蔵書記」の印影が添付されており、さらに蓋の裏面には直に蔵書印が押印してあることから、蘭山の手元にあったものとしてほぼ間違いないと判断している。しかしながら一度、その時期は不明であるが蘭山の手元から、あるいは彼の私塾である衆芳軒から流出したものであることも確かであり、この資料は昭和10年頃に杏雨書屋が購入したものである。よって流出から杏雨書屋に納められるまでの来歴については特段の記録もなく、厳密には伝世資料である。さらに現在は紙

縫りで杉板に留めた状態になっているが、一度は取り外されて保管されていた可能性を示す台紙も残されていたことから、この琉球勾玉が本当に蘭山の手元にあったか否かについては検討の余地が残されているとも考えていた。

然るに今回、彼の所蔵品を記した文献史料において琉球勾玉が掲載されていたことは、琉球勾玉が18世紀の後半には本土に将来していたことを確実にする根拠となる。そして確かに蘭山の手元には琉球勾玉が所蔵されていたことを、同一資料であるかは保留しておくものの、実物資料とあわせて実証できたものといえる。さらには資料だけでなく、その用途についても正確に伝えられていることが分かる。

杏雨書屋が所蔵するような7 cmを超える大きさがあり、頭部に沈線を施すことによって丁子頭とする琉球勾玉が生み出される背景については、未だ分からないことも多い。具体的には石材の入手先を含む製作場所や製作された時期、さらにはノロと称される司祭者のもとにどのような手順を経て琉球王朝からもたらされたのかという流通経路なども明らかになっていない。さらには他の水晶珠などと連結して佩用するようになった経緯も明らかになっていない。

この点については今後さらに調査を進めていきたいが、筆者は大形の琉球勾玉が生み出される背景には、18世紀後半における木内石亭や谷川士清らが本草学や国学の観点から勾玉を収集し、研究していたことが関与しているのではないかと考えたことがある²⁾。その根拠は状況証拠にとどまっているが、古墳時代以降において勾玉が注目される時期はこの18世紀後半からの数十年間の時期に限られており、この時期の研究成果が琉球へ伝わった可能性を考えたものである。今回、石亭や士清が活躍していた時期に、当該期における本草学の第一人者である蘭山の手元に琉球勾玉が到来していることが事実となった。そうであればこの時期に盛んであった勾玉研究の成果が、琉球勾玉が将来した道筋とは逆のルートで琉球へもたらされたことも十分に考えられることである。琉球の物産が一方的に本土に流入したのではなく、琉球へも薩摩藩を通じての交易や、あるいは琉球から直接本土へやってきた慶賀使、謝恩使の団を通じて様々な人やモノが行き交った中に、勾玉の情報

が存在していた可能性を指摘したい。

おわりに

琉球勾玉については、関西大学博物館所蔵品を見た時から「なんじゃこれは」という疑問の念が頭から離れない。古墳時代の勾玉に類似するにもかかわらず、古墳の出土品には存在しない大きさであり、石材も古墳時代の勾玉には使用されるものではない。それゆえ、どうしてこのような勾玉が時空間を異にする琉球に存在しているのかについて、いつか追及していきたいと思いつつながら時間だけが経過してきた。

今回、杏雨書屋が所蔵する琉球勾玉に触れたこと、そして『蘭山先生蔵畜品目』に掲載された琉球勾玉の記述を見たことから、再度琉球勾玉について考察を試みた。18世紀の後半に本草学、物産学などが盛んになり、学問だけでなく「好古」や珍しモノへの関心が、武士階級だけでなく市井の人々にも広がっていく。このような好奇心が学問の基礎にあり、考古学だけでなく、博物館学やあるいは植物学などにおいても、この時期の本草家らの研究成果が明治期以降にあって、様々な分野における学問の発展に寄与していると考えている。今後とも江戸時代から伝世している考古資料を通じて、彼ら本草家らの知的好奇心を追いかけていきたい。

註

- 1) 徳田誠志・山口卓也・山下大輔「武田科学振興財団 杏雨書屋所蔵の「小野蘭山愛蔵石類」『関西大学博物館紀要』第29号 関西大学博物館 2023年
- 2) 徳田誠志「関西大学博物館所蔵「琉球勾玉」について—大形丁字頭勾玉出現の一試考—」『関西大学博物館紀要』第21号 関西大学博物館 2015年

備考

図2・3の掲載にあたっては西尾市岩瀬文庫資料特別利用の許可を受けて掲載したものである。『蘭山先生蔵畜品目』の閲覧と、図の掲載にあたっては同文庫から多大なご高配を賜った。最後に記して感謝の意を表したい。

関西大学客員教授